
学校図書館を対象とした利用者教育のプログラム

米国ワシントン州タコマ市における事例

福永智子

1. 図書館界における 情報利用者の育成

図書館には様々な種類があり、それぞれ異なった機能を果たしている。広大な情報の世界への窓口と化した現代の図書館において、利用者の情報入手の可能性はかつてなく高まっている。先端的な技術やサービスは、まず国立図書館、大学図書館、専門図書館において発展し、公立図書館が後を追うという実態になっている。しかし、巨大な図書館情報ネットワークの存在を背景に、公立図書館にとっても新しいサービスの時代を迎えていることは間違いない。

公立図書館は言うまでもなく、人々の生涯学習の拠点である。新しい図書館の現状を視野に入れ、自己教育力や情報リテラシーを育成する必要性が問われている。しかしながら公立図書館は本来、サービス機関としての性格を有し、憲法に規定された知る自由を保障する機関として存在している。原理的に、公立図書館における教育啓蒙活動には限界があり、利用者を指導する、あるいは教育的責任を果たすといった発想は、馴染まない性質である。端的に言えば、根本的なところで顧客の新規開拓ができないという矛盾を抱えた機関なのである。

しかも、図書館とは、情報ニーズがある程度明確になった利用者には、実際には使えない仕組みになっている。自分が何を探しているのか言葉にできない利用者は、図書館側にもなす術がない。

レファレンス・サービスですら、利用者がカウンターで参考質問を発語しなければ開始されないのであり、主導権はあくまでも利用者の側にある。

情報を持つ者と持たざる者との格差はますます広がりつつあり、壮大な図書館情報システムも、持つ者の側へのさらなる支援であっては、業界として片手落ちである。図書館界全体の中で、人々に対して記録物や情報の価値を知らせること、すなわち利用者の育成は学校図書館および大学図書館に課された重要な役割である。

2. 学校図書館の利用者教育

学校図書館における利用者教育は、図書館界という文脈において、上記の通り重要な役割を分担している。大学図書館と比較すると、やはり義務教育機関に設置された学校図書館の役割は大きい。一方で、学校教育という文脈においては、平成元年の新学習指導要領以後、情報活用能力の育成が前面に出され、日本の学校図書館は新たな局面を迎えている。平成9年の学校図書館法改正、平成10年の学校図書館法施行規則の改正もその一連の動きを示すものである。

このように日本においては、学校図書館の展開が学校図書館法制定後長きにわたって滞り、近年ようやく再出発したと言えよう。欧米先進国に比べて遅れが目立ち、利用者教育の概念すら十分に認知されているとは言い難い現状である。そこで本稿では、日本が長く規範としてきた米国にお

る実践と研究に着目している。

米国では、利用者教育研究が、1980年代以降、新たな局面を迎えている。館種を超えて第2世代と呼ばれる研究者らが、従来とは違った研究報告を行なっている。1980年代以降の利用者教育の特徴として、少なくとも以下の点が指摘できる。

- ① 従来の図書館利用教育から情報リテラシー教育へと変化したこと。転移性のある技能を教育する必要性が問われたこと。
- ② 情報のモノとしての側面だけではなく、コトとしての側面を扱っていること。すなわち、物理的実体としての情報ではなく、認知的存在として扱っていること。
- ③ 情報へのアクセス方法だけではなく、解釈や評価、分析、すなわち利用者にとっての価値や評価の問題を扱っていること。
- ④ 図書館についての知識の学習を目的とするのではなく、図書館を道具として位置づけていること。
- ⑤ 問題解決や意思決定など、何らかの文脈のなかで、情報利用を学ぶという学習スタイルが選ばれていること。

現在、米国では、理論的にも制度的にも、この第2世代の利用者教育の考え方が広く浸透し、実践が始まっている。現状での到達点としては地域差や学校差が大きいいため総括は困難であるが、さしあたっての検討課題は以下の通りである。

- ① 教員と学校図書館員との間での指導における役割分担の議論が不十分である。
- ② 利用者教育が高コストになり、理論上では望ましくとも実践が困難である。
- ③ 生徒・児童の発達段階を考慮した公的な利用者教育の体系（プログラム）が完成されていない。

本稿では、これらの検討課題のうち③に着目し、ワシントン州タコマ市で作成された利用者教育プログラムを取り上げ、今後の方向性を探る。

3. 利用者教育技能の体系表 (プログラム)

現状ではプログラムはまだ検討課題にあると言えるが、様々な試案が発表されている。その種類として、まず①研究ベースのもの、があげられる。理論的な探求の成果として生み出されたもので、実践を視野に入れてはいるが、抽象的な内容のものが多い。次に、②学協会等の発表するもの。日本の全国学校図書館協議会による「学校図書館の利用指導体系表」や、文部省作成の「学校図書館の利用と指導の内容」がその例である。前者の方が多少具体性があるとはいえ、どちらも学習の大まかな目標が設定されているに過ぎず、実用的ではない。米国では、学校図書館の全国的ガイドラインである『インフォメーション・パワー』が存在するが、これには利用者教育の詳細な基準は記されていない。そして③現場で作成されるもの。これは、学校図書館員や学校区図書館（米国）の職員が、独自に作成したものであり、直ちに実践に結びつく点の特徴である。

以下に紹介するタコマ市の事例は、上記の③のタイプに相当する。市内の学校区の図書館であるウィラード・スタッフ・リソース・センターの専門職員のチームが作成したものである。

4. タコマ学校区の事例

さて、日本には馴染みのない学校区であるが、米国では学校図書館独自のネットワークが学校区を中心に整備されている。1975年の学校図書館基準『メディア・プログラム：学校区と学校』以来、学校区をネットワークの基礎構成単位とする協力体制が全国的に浸透している。学校区には学校図書館の仕事を支援するセンターが設置され、学校区のセンターと各学校図書館の関係は、公立図書

館の中央館と分館との関係に近い面を有している。

タコマ学校区の場合は、37 小学校、10 中学校、5 高等学校の合計 52 校の児童生徒および教職員をサービス対象としており、ウィラード・スタッフ・リソース・センターはそのセンター館に相当する。主な業務として、学校図書館資料の集中整理、ビデオ・ライブラリや、教員専用のライブラリの提供、業務規定集の作成、利用者教育プログラムの作成などがあげられる。

以下は、その利用者教育プログラムの一部である。

< 事例 >

タコマ公立学校
図書館 (K-12)
カリキュラム基準

使命の声明

タコマ学校区の図書館メディア・プログラムの使命は、生徒と職員がアイデアと情報の効果的な利用者になることを保障することである。

◆図書館カリキュラムは、以下の事柄を責務とする

- ①教育課程のすべての領域を統合し、向上させる。
- ②図書館メディア専門員と教員とのチーム・ティーチングの機会を提供する。
- ③新しい技術の利用においてリーダーシップと専門性を発揮する。
- ④多くのメディア形態におけるリテラシーを発達させる。
- ⑤生涯学習を支援する。
- ⑥広範なアイデアや情報の価値を認めることを奨励する。

- ⑦アイデアや情報の伝達を促す。
- ⑧好奇心、想像力、創造性を促す。
- ⑨職業の探究への機会を提供する。
- ⑩倫理的規範を発達させる。
- ⑪学習過程において地域共同体へ参加し、共同体の情報源を利用することを奨励する。
- ⑫生徒に対して、環境に対する責任を理解させる。

◆図書館カリキュラムは、以下の事柄を実践する

- ①すべての生徒と職員に奉仕する。
- ②様々な情報源に生徒を接触させる。
- ③多様性を反映した資料を提供する。
- ④技術を通して教育と情報を提供する。
- ⑤読書の楽しさを提供する。
- ⑥リテラシーのための視聴活動を奨励する。
- ⑦学校において、生徒と職員に教育上のアクセスを保障する。
- ⑧生徒と職員に対してアイデアと情報へのアクセスを提供する。
- ⑨高等思考技能や様々な学習スタイルを通して問題解決を促進する。
- ⑩生徒の協力を促すような活動を組織する。
- ⑪継続的現職教育によって保障される。
- ⑫情報技能を個別の学科として教育し、これらの技能を 12 年生までのその他すべての学科に統合する。
- ⑬個人的差異に対する敬意と理解と感受性を促す。
- ⑭生徒が解答を求める場合、彼らの問題を支持する。

タコマ公立学校図書館プログラム K-12

◆生徒による学習の成果

- ①思考と問題解決
 - a. 当面の情報ニーズに関連した問題や問いを明確に設定する。
 - b. 情報を構成し、分析し、評価することに

よって、問いに答え、問題を解決し、結論を導く（表1）。

- c. 様々な資料から情報を総合し、統合する。
- d. 研究のプロセスと成果を評価する。
- e. 既に学習した情報を新しい状況に適合させる。
- f. 教育カリキュラムのあらゆる領域で情報を発見する。

②内容と概念

- a. 様々な情報源や技術から情報にアクセスする（表2）。
- b. 様々な形式において物語のコンセプトを理解する。
- c. 言語への認識を深め、その形式や音を享受する（表3）。
- d. 情報や娯楽メディアを評価する。

③コミュニケーション技能

- a. 理解に向けて聴く技能を利用する。
- b. 様々な方法によって、情報やアイデアを伝達する。
- c. アクセスの道具として技術を使い、アイデアや情報との対話、記録、表現を行なう。

④データ技能

- a. 有機的なやり方で、情報を収集し、記録し、解釈し、適用するために、新しいメディアを含めた様々な情報源を評価し、利用する。

⑤実習室技能

- a. 情報にアクセスするために、適切な道具を選択し、活用する。

⑥グループ技能

- a. 情報へのアクセス、処理、生産、伝達の場面において他者と協力し、協同して作業をする。
- b. 人的情報源の価値を認識する。

⑦多様性の問題

- a. 文化、ものの見方、個人差において多様性を示す情報にアクセスし、評価する。

- b. すべての人々が、アイデアや情報に貢献していることを認識する。

⑧環境問題

- a. 情報源や製品を賢く利用することを通して、環境への敏感さを表現する。

⑨倫理的問題

- a. 情報を、倫理的、法的に責任を持って利用する。

⑩歴史的、現代的展望

- a. 情報フォーマットや新しい傾向、問題の生起についての知識を具体的に説明する（表4）。
- b. 情報へのアクセスや処理における新しい傾向を知っている。
- c. 生涯にわたる豊かさとして文学を扱う。

⑪職業的傾向

- a. 職業や余暇への関心を深めるため、情報にアクセスする。
- b. マスメディアを含め、情報の賢い消費者となるために必要な技能を表現する。
- c. 図書館が生涯学習の機会を提供していることを理解する。
- d. 図書館以外に情報収集の場の選択肢を知っている。

上記の学習の目標を達成するために、それぞれの目標をさらに細分化し、具体的な活動を組織する必要がある。そしてそれらは、子どもの発達段階に応じた適切な順序を踏んでいなければならない。タコマ学区の場合、1つ1つの学習目標に対して、学年ごとの達成目標と教育方法/活動、および資料が明記されている（例：表1-4）。

5. 考 察

このプログラムは試案の段階ではあるが、学習の目標、学習方法/活動、資料の3点についての記

述があることと、それらが学年別に体系化されている点がまず優れている。実践に適したものであり、現状ではこのような例は非常に少ないと言える。また、このプログラムは、米国の学校区図書館の活動を示す資料としても重要なものである。学校図書館ネットワークの支援を受け、制度化された利用者教育の実態がみてとれる。

学習の目標は、思考と問題解決、内容と概念、コミュニケーション技能、データ技能、実習室技能、グループ技能、多様性の問題、環境問題、倫理的問題、歴史的・現代的展望、職業的傾向の11の構成要素から成り立っている。理論的検討の成果を踏まえ、必要な技能を盛り込んで作成された試案であろうと推察される。性格としては第2世代の特徴をよく備えている。教員は教科カリキュラムの体系表を、学校図書館員はこのプログラムをそれぞれ持ちより、授業計画を行なうというわけである。教師は教科のテーマを提供し、学校図書館員は学ぶ手法である情報技能（リテラシー）を提供し、生徒の側は、図書館を道具として、主体的に教科の学習を行なうことができるのである。

従来の第1世代による図書館利用指導には見うけられなかった技能として、思考と問題解決、内容と概念、コミュニケーション技能などが指摘できる。情報教育は、データの収集だけではなく、選択や評価の問題を抱え込むようになってきている。すなわち、情報のコトの側面に焦点が当てられ、利用者が自分でデータの適切性、重要度を判断すること、そしてそれらを何かの目的に役立てることが求められている。

一方米国では、情報リテラシーの概念が、コンピュータ技能を中心とする新しい技術に関連したものと、図書館情報技能とを合わせたものとして理解される傾向がある。すなわち、コンピュータやネットワークの影響で生まれ変わった現在の図書館も、これまでの歴史と実践のうえに蓄積されたことに違いはない。表3に見られるような文学

関連の技能は、学校図書館における読書指導や利用指導の実績、文学教育や言語技術教育の伝統、それらの重みを感じさせるものである。新しい技術も西洋文明の長い歴史の中に、適切な居場所を与えられているものと見受けられる。

表1 構成要素：思考と問題解決

学習の目標：情報を構成し、分析し、評価することによって、問いに答え、問題を解決し、結論を導く

学年	目 標	教育方法／活動	情 報 源
K			
1	生徒は図書を評価し、フィクションとノンフィクションとを識別する		
2			
3	生徒は1点の資料から、最も重要な情報を選び、着目する	1. 最重要点に着目する技能を指導する	着目の指導者
4	生徒はノートの形式で、情報と記録を抽出する 生徒は情報の組織化および適切性の評価の手法として図書の部分を利用する	1. ノートを取る技能を指導する 2. 情報の組織化のされ方を知り、またその図書の評価を行なう手法として図書の部分について紹介する(はじめに、目次、巻末索引、表題紙と著作権)	
5	生徒は情報をまとめたノートから、資料のアウトラインを形成する	1. アウトライン形成の初歩を紹介する(経時的、または網を張るように)	
6	生徒は自分で作成したノートから、適切な情報と記録を抽出する	1. ノートを取る技能の継続的指導 2. 分析的情報源	
7	生徒はトピックを証拠立てる重要な事実や詳細部分を要約し、言い換える		
8	生徒は研究トピックの大きさを狭くしたり広げたりするために、アイデアのブレインストーミングを行なう		
9	生徒は体系的なノートの中から、適切な情報や記録を抽出する		
10	生徒は多数の情報源から、同じトピックに対する見解を比較する		SIRS 対立する見解
11	生徒はあるトピックについて、印刷資料、非印刷資料を含む多様な資料から抽出した情報を、比較対照する 生徒は資料の信頼度を評価する		
12	生徒は著者の作品をモチーフ、観点、偏見、権威の面から評価する 生徒は古い／新しい情報の重要性を理解する 生徒は一次／二次／三次資料の重要性を理解する	1. 一次資料、二次資料の見本を紹介する 2. 二次資料の偏りを説明する	

表2 構成要素：内容と概念

学習の目標：様々な情報源や技術から情報にアクセスする

学年	目 標	教育方法/活動	情 報 源
K	生徒はノンフィクションの図書からも情報が得られることを知る	1. 同じ主題のフィクションとノンフィクションの図書を読む	フィクションとノンフィクション
1	生徒は視覚的資料から意味を読み取る	1. 言葉のない絵本を読む 2. 情報源として挿絵について議論する 3. 視聴覚資料を観る	絵本 視聴覚資料、ビデオ、テープ
2	生徒は雑誌が情報源であることを知る	1. 雑誌とその収録トピックを説明する	雑誌
3	生徒は知らない言葉を辞書で調べる 生徒は百科事典をよく知る 生徒は学校の図書館目録システムを利用する 生徒は電子情報サービスについて知る	1. 情報を探するための様々な方法を提示する。辞書、百科事典、図書館目録、電子百科事典	LCDパネル 辞書
4	生徒は地図帳の情報について知る 生徒は図表の解釈をはじめめる	1. 地図帳を導入する 2. 地図の手がかり、特別な地図を示す 3. 図表、地図、グラフの読み方を示す	地図帳
5	生徒は情報を探するため百科事典の索引と参照指示を利用する 生徒は様々な辞書を利用する	1. 単純な報告のための百科事典の使い方を提示する 2. 年鑑を利用する 3. 辞書を利用する	百科事典、年鑑、シソーラス、専門的/最新辞書
6	生徒は情報収集のため地図帳と年鑑を利用する 生徒は情報源として新聞を利用する	1. 地図帳と年鑑から必要な情報を探す 2. 新聞の最新/週及的探索を導入する	地図帳、年鑑、地域的/全国的新聞
7	生徒は情報を探するため雑誌の索引を利用する 生徒は文学の参考資料について知る	1. 教室の課題に関連し、最新/週及的雑誌記事探索を導入する 2. 文学の参考資料を探し、利用する	雑誌、電子的雑誌記事索引など 詩の索引
8	生徒は伝記の参考資料について知る	1. 教室の課題のために伝記の参考資料の情報を探し、利用する	伝記の辞書 Current authors
9	生徒はオンライン検索について知る	1. 公共図書館のOPACなどオンライン情報源を導入する	オンラインサービス
10	生徒は主題索引について知る	1. 教室の課題のため主題索引で情報を探し、利用する	Short story index など
11	生徒は教室の課題のために特定の参考資料を探し、その情報を利用する	1. 教室の課題に適した特定の参考資料を探し、情報を利用する	押韻事典 Physician's desk reference
12			

表3 構成要素：内容と概念

学習の目標：言語への認識を深め、その形式や音を享受する

学年	目 標	教育方法／活動	情 報 源
K	生徒は押韻について知る 生徒は反復について知る	1. 押韻のある物語を読む 2. 反復的物語 (Jesse Bear, Old Lady Who Swallowed a Fly など) を読む	押韻のある物語 反復的物語
1	生徒は押韻と反復に親しむ 生徒は文学の形式について知る	1. 物語として歌を鑑賞する 2. 文学としてフォーク音楽を鑑賞する 3. パタンブック (Z was Zapped, Fortunately Unfortunately など) を読む	raffi books Quackenbush book パタンブック
2			
3	生徒は口承的伝統の入門的知識を得る	1. ストーリーテリングを通して物語を味わう	民話
4	生徒は詩とその多くの形式を知る	1. 様々な詩の形成を紹介する a. スタンザ b. 俳句 c. パタン詩 d. 五行詩 e. リメリック 2. 詩を書く	詩の本
5	生徒は手話や記号を言語形式として知る	1. 数学を言語として紹介する 2. 手話の本を紹介する 3. コード一覧表を紹介する	手話の資料 点字形式の本
6			
7	生徒は文学作品に使われる象徴言語を知る 生徒は文学的要素を知る	1. 散文と詩における象徴言語の導入 a. 直喩 b. 隠喩 c. 比喩的表現 2. 文学的要素の導入 a. 登場人物 b. 背景 c. 構想	
8			
9	生徒は象徴言語を知る 生徒は文学的要素を知る	1. 象徴言語を導入する a. 誇張 b. 擬人化 c. 頭韻 2. 文学的要素の導入 a. 観点 b. テーマ c. 象徴主義 d. 著者のスタイル／調子	
10	生徒は比較言語を知る	1. 広告や文章の神話的用語について議論する	
11	生徒は言語用語の多様性について知る 頭字語、口語など	1. 方言、職業語、レトリック、 外来語、慣用句、俗語	
12			

表4 構成要素：歴史的・現代的展望

学習の目的：情報フォーマットや新しい傾向、問題の生起についての知識を具体的に説明する

学年	目 標	教育方法／活動	情 報 源
K	生徒は、伝承童話やマザーグースに親しむ	1. 歴史の一部として伝承童話について議論する 2. 伝承童話の成り立ちを議論する	
1			
2	生徒は、コルデコット賞受賞の図書に親しむ	1. コルデコット賞受賞作品を読む 2. コルデコット賞の書名をあげる 3. コルデコット賞受賞作品の歴史的な例をあげ、議論し、読む 4. 生徒はある年度のコルデコット賞受賞作品を自分で選ぶ 5. 受賞者のスピーチを聞く	コルデコット賞の受賞作品 文学的なビデオ
3	生徒は民族文学の歴史的な重要性を認識する 生徒は寓話の特性を認識する	1. 寓話の要件について議論する 2. 寓話の歴史的展開について議論する 3. 500のシンデレラの異説から選ばれた作品を読んで、議論する 4. デューイ十進分類法の398の導入。 寓話はEやFではなく398に分類されることを知る 5. Red Riding Hood を読む a. 外国の踊り子のテーマ b. 子どもへの最大の危険。何百年も前に森で迷子になる 6. 寓話の3つの要件を指導する a. 動物が人間と会話をする b. 道徳的教訓 c. 短い 7. イソップと彼の枠組みを議論する 8. イソップの寓話を列挙する 9. 寓話の動物のキャラクターをあげる 10. 寓話を戯曲化する	イソップ寓話
4	生徒は図書の変化する形態を理解する 生徒は図書の組織化の方法が確立される歴史的必然性について知る	1. デューイ十進分類法の10類を知る 2. 現状での手法のアイデアを提示する 3. 図書の歴史を提示する a. 呼び売り本 b. ホーンブック c. グーテンベルク印刷術	
5	生徒はニューベリー賞の重要性を認め理解する 生徒は情報収集の未来的傾向を知る	1. ニューベリー賞受賞作品を提示する 2. 受賞作品の導入部分を読む 3. 受賞者のスピーチのビデオを観る 4. 電子百科事典、バーチャルリアリティ、電子会議について議論する 5. インターネットの未来への影響力について議論する	ニューベリー賞受賞作品 電子百科事典 モデム／電子メール

6	生徒は神話の歴史的影響について理解する	<ol style="list-style-type: none"> 1. 文学発展の歴史的年代を議論する 2. ギリシャ神話の時間軸を作る 3. 神話の提示。ギリシア、北方、ローマ、米ネイティブ、アフリカ 4. 神話の現在の要件を提示する 5. 神話が様々な文化や背景から生まれることを議論する 6. タコマ公共図書館を訪れる 7. 同じ資料で図書の形式と電子形式とを比較する 8. 古典とはなにか、提示する (例：時間の試練に耐える) 	神話
7			
8	生徒は、図書出版から電子的出版への歴史について知る 生徒は古典文学の永久性について知る	<ol style="list-style-type: none"> 1. 古典作品のブックトークを行なう 2. 古典の提示をする 	電子索引 古典 古典の書誌
9			
10	生徒は文学作品と社会の発展との相互作用について知る	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会問題に関する現代文学のブックトークを行なう 2. 世界情勢、市民、米国政府の科目と統合する 3. 多文化イベントに着目する (例：中国の新年、黒人歴史月間) 4. 多文化イベントの書誌を作る 5. 科目との統合において発表者や議論を提供する 6. 英語の科目と統合する 	
11			
12			

文 献

- (1) アメリカ・スクールライブラリアン協会、教育コミュニケーション協会共編、全国学校図書館協議会海外資料委員会訳『インフォメーション・パワー：学校図書館メディア・プログラムのガイドライン』1989
- (2) Willard Staff Resource Center, *Tacoma Public Schools Library K-12 Curriculum Standards*. Tacoma, Wash., 1994
- (3) 福永智子「地域の教育を支えるウィラード・スタッフ・リソース・センター」全国学校図書館協議会編『マルチメディア化が進む学校図書館：アメリカ・カナダの学校図書館を訪ねて』1996、154-161頁

ふくなが・ともこ/短期大学部助教授